

商品資料館便り

商品資料館と商品学

商品資料館館長
経済学部長

兵藤 隆

商品学という学問があることを知ったのは私が一九八五年に山口大学経済学部に入學してからのことでした。当時は高取教授が同講義をご担当になり、「商品学の本質たるか」を熱く語っておられたのをよく覚えています。「我が経済学部にはどだけの宝があるのか」といったこともおっしゃっていました。学生の頃は薄暗い「商品陳列室」のドア上のプレートを眺めながら「へえ、そうなんだ」程度のことには感じられませんでした。私が講師として赴任した翌年一九九五年に現在の商品資料館が完成し、いままですら眠っていた数々の収集品が陳列されたのを見て圧倒されました。一九〇五年に山口高等商業学校が創立されて以来、西洋諸国に追いつき追い越せという国策を受けて、国内外から数多くの商品を集め、分析、分類し、我が国の産業育成のため歴代の商品学研究者が多くの予算とエネルギーを注ぎ込んできたことを今の学生たちはあまり知らないのではないのでしょうか。奇しくも日本陶磁協会の発行する「陶説」二〇一九年一月号にて、長く眠っていた我が経済学部の「宝」と「歴史」の価値が紐解かれていきました。今回、「商品資料館便り」が復刊することが決まり、山口大学経済学部の歴史と伝統が語り継がれていく素晴らしい機会となりました。読者のみなさんも私と同様、これからの「便り」を楽しみにしてください。

商品学という学問があることを知ったのは私が一九八五年に山口大学経済学部に入學してからのことでした。当時は高取教授が同講義をご担当になり、「商品学の本質たるか」を熱く語っておられたのをよく覚えています。「我が経済学部にはどだけの宝があるのか」といったこともおっしゃっていました。学生の頃は薄暗い「商品陳列室」のドア上のプレートを眺めながら「へえ、そうなんだ」程度のことには感じられませんでした。私が講師として赴任した翌年一九九五年に現在の商品資料館が完成し、いままですら眠っていた数々の収集品が陳列されたのを見て圧倒されました。一九〇五年に山口高等商業学校が創立されて以来、西洋諸国に追いつき追い越せという国策を受けて、国内外から数多くの商品を集め、分析、分類し、我が国の産業育成のため歴代の商品学研究者が多くの予算とエネルギーを注ぎ込んできたことを今の学生たちはあまり



これまでの商品資料館

商品資料館企画室
観光政策学科准教授

袁 麗暉

現在の商品資料館は平成八年に開館後二三年の歳月が過ぎました。開館当初、ED照明をつけるなど、工年間一五〇〇人余りの来館者もありまして、賑やかでキャンパス時には商品資料した。しかし、その後、担当館での企画展を計画し、平退職で、平成一一年から商成二七年から毎年開催する品資料館は来館の申し込み、商品資料館が経費ゼロのことに応じて開館するということとなり、それから、きわめて困難な状況の下、一〇年余りは事実上閉館状態で、平成二九年の来館者数態にありました。平成二〇が一九〇〇人を超え、また、年商品資料館に隣接して東。 亜経済研究所（山田孝太郎 平成三〇年、商品資料館記念館）の新築オープンに学外有識者二人のアドバに伴い、研究教育助成室が商イザーを迎え、又専門家も品資料館の一階に移され、来館調査を行い、かなりのやと商品資料館の無人状態から学術成果を収めました。この態にピリオドを打ちました。しかし、一〇年間事実上の一層貢献できる拠点と学内外から忘れ去られつつ、なっていくことでしょう。

ある存在にしていたように、平成二〇年の来館者数はわずか三二七人でした。来館者数を増やすために、商品資料館は中高の生徒とPTAの山口大学見学、大学生が主催するキャンパスでくつツアー等を積極的に受け入れ、平成二一年から来館者数が徐々に増え、平成二四年に一三〇〇人余りに到達しました。さらに、

商品資料館便り

再開によせて

商品資料館アドバイザー

山口県立美術館副館長

斎藤 郁夫

今年の一月二九日、商品資料館を見せていただいた。これが二回めである。第一印象は前回同様、物であふれかえっている——ということだった。たいへん興味深い資料もあって、じっくり見ていきたいと思っただが、ふと顔を上げて周囲の展示資料を見回すと、果たしてどれくらい時間がかかるか、ちよつと見当もつかなかった。

ここに収められた資料は「商品」であるという。少なくとも、かつては商品だった。たとえば昨年の「河井寛次郎展」に出品された河井の初期の作品。河井の芸術家としての評価の高まりが、今では、この資料を美術作品にまで押し上げている。また、見学しているときは気づかなかつたが、『商品資料館陳列室の紹介』に掲載されている、「絹張りに美しい刺繍が施された屏風」。これが明治期に海外輸出用に盛んに制作された刺繍絵画であるならば、きわめて希少な美術作品とみなされうるだろう。

美術作品を見ながら、それが生み出された時代の様子をあれこれ想像するのは楽しいことだが、同じように、かつての商品が植札のついたままの姿で生き生きと流通していた頃の状況を思い描いてみるのもおもしろそうだ。当時の人々の身の回りには、どんな物(商

品)が置かれていたのか。何を食べ、何を着て、どのような一日を送っていたのか。商品に附属する詳細な情報をもとにすれば、一層具体的に思い描けるだろうか。

将来、商品資料館は「研究者・地域社会に開かれた学術・文化施設」をめざすという。

そのためには、上記のような具体的なイメージを喚起するような、わかりやすく魅力のある展示とはどのようなものか、議論を深めていく必要があると思う。かつての商品がモノとしてたんに並べられているだけではなく、商品が生きていた時代の様子までもが生き生きと蘇るような展示。：常に「やりたいこと」は「やれること」を超えて大きくなってしまふものだが、まずはその第一歩として、この『商品資料館便り』の再開によって多くの人々が関心を持つてくれることに期待したい。



卒業生・経営者視点での所感

商品資料館アドバイザー

山口日産自動車株式会社

代表取締役会長

末富 善昭

祖父、父、私(昭和四六年卒)は三代の経済学部卒業生です。一年時は平川、二年以降亀山地区(現在の県立美術館)で過ごしました。三九歳で山口日産自動車(株)、三代目社長に就任し、六四歳で会長職、現在七〇歳です。『商品館』は昭和二二年から四七年まで無人の館で在学中は存在を知りませんでした。

今回、『商品資料館』を拝観し、関係資料を自分なりに目を通しました。

明治四一年一九〇八年に始まり一一一年の歴史がある。所蔵品約八〇〇〇点のうち八割強が明治・大正時代の収集である。設立時の『商品学』は開国、文明開化時代のマーケティングの香りを漂わせている。私の在学時代はカラーテレビ、クーラー、カーの『3C』が三種神器でしたが、商品館が無人であったことと関係性はないだろうが、当時『マーケティング』の授業はなかった。卒業後の昭和四七年、第三代高取先生の商品学では、商品戦略、品質管理、地場産業の製品開発など興味深い講義に広がったようだ。時代は日本の高度成長、情報氾濫時代の中、一九九五年新設『商品資料館』から学生が何を学ぶかは混沌としてくる。山口大学の教育理念「発見し、はぐくみ、かたちにする知の広場」に関しては、

経営者の経験から人材育成の本質を突いており、シラバスに反映さす等、深化を望んでいた。

複雑化する社会のなかで、発見力は、好奇心、気づき、観察力、診断力、洞察力センサー等々。はぐくむは整理、分類、選別、陳列、編集、思考、デザイン等々、これらはあらゆる分野のOUTPUTの原動力である。これらさらさら複雑化する社会に送り出す学生に対し、教育理念を社会人力の根幹として深化を願っています。

最近、河合寛次郎の作品が貸し出され、その後外部学芸員による当館の調査報告内容は研究者・地域社会に開かれた学術・文化施設への期待が持たれる。

一方、収蔵品はそもそも美術品や骨董品としてではなく、商品資料としての目的からして、学生に対しては、感性を刺激する取り扱いを模索するのも一法かとも感じているが、商品・情報・氾濫時代での活用策は難題でもある。

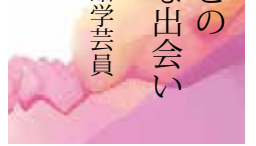


商品資料館収蔵資料との

幸運な出会い

菊池寛実記念智美術館学芸員

高田 瑠美



山口大学経済学部の商品資料館に、明治期以降の陶磁器資料が多数収蔵されていることを知り、昨年春に一部の資料調査が実現したのは、京都の河井寛次郎記念館で学芸員をされている鷺江氏からのご教示がきっかけでした。二〇一六年から昨年にかけて巡回した、陶芸家・河井寛次郎（一八九〇～一九六六）の没後五〇年展の準備中、商品資料館に大正時代に制作された河井の初期作品がまとまって現存することが明らかになり、その中から九点が展覧会に出品されました。これらは陶磁研究者の間でも知られていなかった新出資料であり、初めて見た筆者も、大正期の河井や周辺の陶磁作家について調べている関係で鷺氏に照会した所、詳細をお知らせくださるとともに、山口大学の、しかも経済学部の資料館に河井作品がこれほどまとまっていたのは不思議です、と仰っていたのが印象的でした。その理由はもちろん判然としませんが、資料館が明治三八年の山口高等商業学校の設立と、同四一年に開室した商品学の商品陳列室を背景にしていること、資料点数が陶磁器、ガラス類だけでも一七九七点に及ぶということ、河井以外にも貴重な近代陶磁資料があるのではという期待を抱いたことを覚えていきます。

実際に商品資料館を訪れ、一階の陶磁器と

ガラス類の展示室に入った時には驚きました。壁面全体と独立ケースには、河井作品以外にも、国内各窯業地の製品の他、中国、朝鮮半島などの東洋陶磁、ドイツやイギリス製の西洋陶磁からガラス器、島津製作所製の標本模型などが並んでいます。さらに二階に上がるのと金工品や漆器、染織品などの工芸品を含む様々な日用品、原料素材、鉱物から電子機器まで、どの棚にもびっしりと物が陳列されていました。資料が性質ごとに分類され陳列される様子は、現代の博物館や美術館にも通じるものがありますが、商品資料館がそれらの施設と異なるのは、多様な品名や産地（収集地）、制作者、収蔵時期に加え価格までの情報が付随した形で、ある時代の商業活動の中で流通した物品見本として、一堂に集められていることです。そしてこの、工芸品を美術の範疇で扱う現行の美術館とは異なる収集展示の在り方は、明治以降、日本の工芸に関わる物づくりに起こった変化を考える際の事例としても非常に貴重な集積であるといえます。

前述した、何故ここに河井の大正時代の作品が多数収蔵されているのかという疑問も、こうした面から改めて検討すると重要な問いであるように思われます。というのも、現在ではいわゆる民藝運動を牽引した陶芸家として著名な河井寛次郎ですが、大正期に作陶家として独立する以前には、東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科を卒業後、京都市陶磁器試験場に技手として勤務し、工業の面から陶磁器研究に従事した経歴もあるので、明治以降、輸出や国内向けに商品として

さかんに作られた工芸品が、徐々に工業生産と分離し、作り手の創意や芸術表現を反映した「作品」として扱われるようになる時代背景の中で、河井は自身の経験から、個人の創作と工業の世界とを分かつたず、総合することを思索しながら、仕事を続けた作家でした。

生産技術の中には工業と美術という部門があり、工芸はその真ん中にあること、生産の中で新しい材料と技術が現われると、前のより不慣れた材料と技術は美術の方へ棚上げされ命脈を保つ、ということ、河井は著述に残しています。河井の言葉を反芻するとともに、工芸を美術の側面から扱うだけでは抜け落ちてしまう多くの事を教えてくれる、商品資料館の資料群と出会えた幸運に感謝したいと思います。商品資料館は過去から現在へと、大きく変化した物にまつわる様々な情報を、タイムカプセルのように閉じ込め、私たちに示してくれているのです。



明治38年、山口大学経済学部の前身である山口高等商業学校が創設されました。創設と同時に設置された商品学の授業の研究資料として各種商品の収集が始められ、明治41年に商品陳列室が設置されました。その後も一貫して商品資料の収集が続けられ、平成7年には商品陳列室を発展的に継承する形で、全国的にも珍しい商品資料館が建設されました。現在、商品資料館には、永年にわたって収集された主要な産業の商品や輸出入商品など約8,000点の貴重な資料が収蔵されています。特に戦前の主要な輸出入品の収集は、品種、数量ともに他に類を見ないものです。商品資料館は、産業経済の実証的教育研究の伝統継承及びその発展に資することはもとより、これを広く社会に公開し、地域の人々の生涯学習教育にも貢献していきます。

展示室

陶磁器・ガラス類展示室…1797点

金属類展示室…2912点（金属類以外の展示物含む）

繊維・紙パルプ・木工品展示室…2444点

貨幣展示室…740点（貨幣以外の展示物含む）

沿革

明治41年：商品陳列室設置

昭和19年：増築「商品館」へ

昭和48年：経済学部新校舎A棟へ商品陳列室として移転

昭和54年：同C棟へ移転（床面積拡張）

平成7年：現在の「商品資料館」竣工

変わるもの

変わらないもの

経営学科准教授

柳田 卓爾

商品資料館の歴史は、山口高等商業学校の開校時にまで遡るようである。『山口高等商業学校沿革史』によると、「高等商業学校としての本校の学科課程は明治三十八年（西暦一九〇五年、筆者注）二月二十七日文部省令第三号「山口高等商業学校規程」第二条に依つて制定」（五八四頁）され、その中に、「応用化学及商品学」という学科目が見られる。また、「防長教育会用途指定寄附金の一部を以て明治四十一年旧高等学校時代の理化学教室を商品学講義室一一・五坪及商品陳列室一一・五坪に改造した」（六一四〜六一五頁）とある。つまり、商品学や商品資料館は、いわゆる「理系」に近い位置づけから出発していたことが垣間見られる。

商品標本に関しては、「商品の授業の為に多数の商品標本を蒐集するの必要を生じ」（五四一頁）、防長教育会からの寄付等により商品標本の購入を進め、「大正四年度末現在に於て商品標本六千六百二十九点価

格一万三千二百四十四円四十二銭に達し」（六一五頁）たとある。現在、八千点ほどを保存している

ので、商品資料収集の基礎は、明治末頃から大正初期にあったと考えられる。しかし、残念ながら、これらの商品標本が、授業においてどのように活用されていたのかについての詳細は、不明である。

その後、日本経済においては、戦後の高度成長期を経て、機械・エレクトロニクス分野、あるいはIT・サービス分野などが発展していった。主力となる商品の転換に呼応するように、商品学においても、これらの分野に研究・教育対象がシフトしていった。また、経営学やマーケティング論など、いわゆる「社会科学」的なアプローチを採る研究者が、商品研究の領域においても大半を占めるようになっていった。研究・教育対象となる商品の変化、研究アプローチの変化など、大きな環境変化の流れの中にあって、保存されている商品資料、そして商品資料館を研究・教育などにどのように活かしていくのか。大きな課題に直面している。

注：○内の頁数は、『山口高等商業学校沿革史』の頁数（引用元）である。また、適宜、旧字体を新字体に変換している。

商品資料館活性化に向けた取り組み

商品資料館企画室長

経営学科准教授

櫻庭 総

山口大学経済学部では、ここ数年、商品資料館活性化に向けた取り組みが進んでいる。以前より、当館の陶磁資料などが全国の河井寛次郎展や本学芸術資産継承事業成果展「宝山の一角」に出展され、また、当館への見学者も毎年千人程度で推移している状況にある。

当館のスペース利用についても、二階の演習室にて、オープンキャンパスの際には学生開発商品や卒業論文の展示（藤田健ゼミ主催）が行われ、高校生から好評を得ているほか（今年のオープンキャンパスでは、藤田ゼミに入りたいとの想いでわざわざ県外から来館した高校生がいたほどである）、二〇一六年には「地域から考える冤罪の過去・現在・未来」展（筆者主催）が開催された。

そのようななか、二〇一六年度に「商品資料館活性化ワーキンググループ」が設置され、当館の現状把握のための調査（来館者数ならびに来館者の基本属性に関する調査、商品資料館関

連諸規則の収集など）および当館活性化のための対応策を検討し、「商品資料館の今後のあり方について（提言）」をまとめることができた。

この成果を踏まえ二〇一七年度には、「商品資料館企画室（臨時）」が立ち上がり、室長による河井寛次郎展の視察や、学外からのアドバイザー（山口県立美術館副館長・齋藤郁夫氏および山口日産自動車株式会社代表取締役会長・末富喜昭氏）の就任などを実現することができた。

二〇一八年度も「商品資料館企画室」は継続することとなり、卒業生より寄贈頂いた大正時代の講義ノートをもつて、卒業生の折に展示することができ、さらには、情報企画室の協力を得て今回の『商品資料館便り』復刊にまで漕ぎ着けることができた。

そのほか、日本陶磁協会月刊誌「陶説」に当館に関する論叢が掲載される機会に恵まれた。宮川智美・高田瑠美「調査報告 山口大学経済学部商品資料館」陶説七九〇号（二〇一九年三四〜四三頁）、幸いにも当館二階演習室のエアコンも更新された。

魅力的な企画を検討することはもちろんであるが、その持続可能性と労力の分配も大きな課題である。

今後の方向性を検討するにあたり、アドバイザーの方との場合は有意義なものであった。とすれば本館の価値を陶磁器等の美術的価値ないし歴史的価値に求めがちであった筆者に対して、「美術品」ではなく「商品」としてのメリットに着目できること、本学の教育理念に合致するような学生教育に当館を利用すべきこと、学生の五感に訴え、その感性を磨くような企画が考えられること等、貴重なご意見を頂いた。

これからは、地域の方や学生の知恵や感性にも学びながら、ともに当館の価値を発見し、はぐくみ、かたちにしていくことが求められているといえよう。

以上のように順調な取り組み状況にあるといえるが、今後は、



編集後記

平成七年四月二六日「商品資料館だより」第一号が発行された。商品資料館の新宮がなった日である。執筆者は高取健郎教授。初代横地石太郎教授。二代田中稲穂教授の学統を継ぐ、第三代商品学担当教官である。高取教授は、昭和四十七年四月ご着任。爾來四半世紀、八千点余の商品資料の学術価値を高め、地域に開放された施設にするという難しい課題に取り組み、志半ばで逝かれた。

もとより本資料館の希少性は、明治以来、商品資料の収集にあたり、ご尽力いただいた防長教育会並びに山口高等商業学校同窓会「鳳陽会」に負うところ大である。今後、商品資料館が研究者・地域社会へ開かれた学術・文化施設としての価値を高め、一灯を掲げ地域社会の一隅を照らし続けることが肝要である。

平成一三年四月二二日の第二〇号発行以降二〇有余年の空白の時を経て、この度、第二二号を発行する運びとなった。ご縁を戴いた関係者各位のご指導とご助力の賜物である。

平成三年、商品資料館は竣工二五周年を迎える。（商品資料館企画室・経営学科教授 成富 敬）